



### 第15回全日本高校模擬国連大会報告

ご報告が遅くなりましたが、11月13日(土)14日(日)の両日に渡り、全日本高校模擬国連大会が開催されました。全国から216チームの応募があった中で本校からは高1 榊田君、高2 内田君のペアが書類選考を通過し、全国大会への出場権を獲得しました。新型コロナウイルスの新規感染は落ち着きを見せてはいるものの十分には収束していない段階での開催となり、今年是对面開催(兵庫県淡路島)とオンライン開催を併用するという初めての試みが実施されました。本校は感染リスク及び11月15日から高1の宿泊研修を控えていたことを考慮して、オンライン議場を選択しました。「核軍縮・核不拡散」というテーマで熱い議論が交わされました。本校は被爆国である日本大使という立場でこの議題に挑みました。国際大会への出場にまでは至らなかったものの、各国の立場・政策をコンパクトにまとめた「ポジションペーパー」という書類を配布してアピールするのですが、その出来栄を高く評価していただき「ベストポジションペーパー賞」を受賞しました。両君から原稿を寄せてもらいましたので、お目通しいただけると幸いです。

高校1年6組 榊田 啓太郎・高校2年2組 内田 紘輔

今回の全日本高校模擬国連大会にて PPP 賞を頂きました、高校2年の内田紘輔と高校1年の榊田啓太郎と申します。この度は栄えある賞を頂きましたことを非常に嬉しく感じると同時に、模擬国連という活動の中で1つの大きな終着点に到達し、やり切れたことに大きな感銘を受けております。

今回受賞した PPP 賞が分からない方が多くいらっしゃるかと存じますので、少し解説をいたします。PPP 賞の PPP とは Position Policy Paper の略で、日本語に直訳いたしますと位置政策書、もう少し自然にすると政策方針書でしょうか。事前準備にてリサーチしたもの等を文面上に起こし、一つの紙としてのクオリティを評価して頂く賞です。この賞を今回の全日本大会では受賞いたしました。

今大会は11/13、14の二日間に分かれて行われました。校内選考が9月の初旬にあり、その上で大会の書類選考があったため、今回割いた時間は3ヶ月ほど、二人がペアを正式に組み始めたのは1月頃でしたから実質的にかけた時間は11ヶ月ほどとなります。しかしながら、これだけ長い時間を費やしても目標であった最優秀大使賞には届かず、力不足を痛感いたしました。

ここで味わった悔しさを糧に、来年はこの借りを返したいと考えていますし、それと同様に、この経験をグローバル部、そして模擬国連界の後輩たちにも伝えて行けたら、と考えております。

ただ、再度申し上げます通り、模擬国連という活動の中の大きな終着点に辿り着いた、とも感じております。ここに辿り着くまでに出会った数多の人に感謝し、また初心に帰り、精進して参る所存です。少し長くなりましたが、お読み頂きありがとうございます。これにて全日本大会の報告とさせていただきます。



左：高1 榊田君  
右：高2 内田君

## Instant Tech 自動運転に関するワークショップ開催報告

グローバル通信103号でご紹介したパイソンという言語を用いた自動運転に関するワークショップを期末試験が終わった翌日の12月15日(水)に実施しました。中1～中3の10名の生徒諸君が参加しました。講義と実技を組み合わせたワークショップとなりましたが、日ごろの授業ではあまり扱っていない内容なので収穫も多かったことと思います。各学年から1名ずつ感想文を寄せてもらいました。どんな学びがあったのかを感じ取っていただけると幸いです。

1年3組 清水 康誠

自動運転技術。この言葉を聞いて、あなたはどのようなイメージを持つか。AI、ロボット、人感センサー。機械的な物体を思い浮かべる方もいれば、人為的な事故の激減や技術の進歩など明るい未来を思い浮かべている人もいるであろう。

私も自動運転について無機質な先入観を抱いていた。ただし、この講習を受けてからそのイメージは180度ガラッと変わった。

この講習を受けようと思った理由は1つ。パイソンというアプリケーションの開発ができるツールを扱ってみたいからだった。元々パイソンに限らずコンピューターを取り扱うことが大好きな私は、グローバル通信の片隅に載せられていたこの講習に少なからず興味を惹かれた。

この講習は30人のところを10人で行った上に、自分と同じクラスの人是一人も受講しなかった。良くも悪くも緊張しながら、海城に足を運んだ。

ただし、「パイソンを楽しみに講習を受けたため、パイソンがとても楽しかった。」というわけではなく、実は他に更に楽しいことがあった。無論、パイソンもとても楽しかったが、それ以上に

自動運転技術の実用化についてどことなく心が踊った。予測によると、完全自動運転は残り9年で実現するという予測が立っているのだ。その時に私は22歳。完全自動運転が搭載された車に乗ることができるという幸福感とも期待とも言えない感覚が私を襲ったのだ。

近頃はAI化やロボットの技術が目まぐるしく変化している。そして、彼らが私たちの生活を本格的に支えてくれる日が来ることを教えてくれたこの講習は、とても有意義なものであった。

2年5組 升水 昂希

今回僕がInstant Techに申し込んだ理由は、父からの勧めでした。僕はもともと自動運転に関することに興味があったのでそれを受けて申し込みました。今回Instant Techをうけたことは自分の人生にとって大きな糧になったと思います。その理由は主に2つです。

1つ目は自動運転について違った目線から見る事ができたことです。僕は今まで自動運転について法律的な目線から見ていました。しかし今回のInstant Techでは技術的な目線から見る事ができました。自動運転にはたくさんの技術が活用され、通常車よりも価格が大幅に高くなります。けれども自動運転にはたくさんのメリットも存在しました。Instant Techでは自動運転についてより深く知ることができました。

2つ目はプログラミングの技術を自動運転の観点からより深く知ることができたことです。自動運転にはAIが搭載されており、プログラミング技術が必要不可欠です。自動運転ではカメラで物体を認識し、その物体に向かったり、避けたりする指令をAIが車に出すことによって進みます。プログラミング技術はその過程の上で必須条件です。今回はこの過程のプログラミングをより深く知ることができ、大変興味深く思いました。

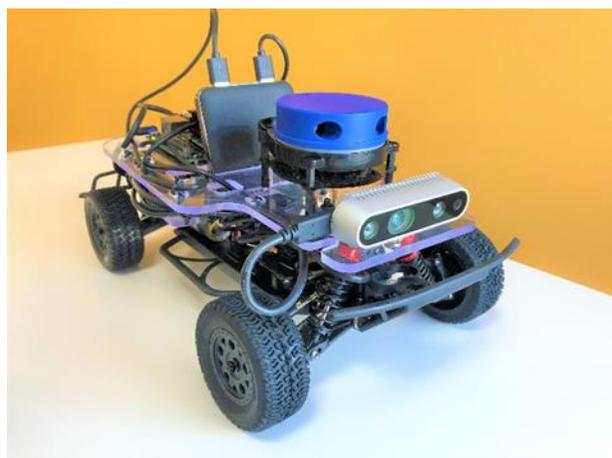
今回の体験をきっかけとして、自動運転についてもっと知ろうと思うことができました。講師の方、本当にありがとうございました。

3年7組 古口 知広

今回の自動運転技術や画像処理技術を体験する講習に参加した中学三年の古口です。この講習では、自動運転の実用化に関して自動運転車が普及することの利点や自動運転技術の現在の状況、自動運転をするために必要となる機器や技術について講義形式で学び、簡単な画像認識の方法を体験した後で小型の自動運転車の走行を見学しました。

人間が何もしなくても目的地を指定するだけで車が連れて行ってくれる、そんな理想の世界を思い描いたことはありませんか。そんなSFのような世界を実現させてくれるのが自動運転技術なのです。もっとも現状では車間距離の調整やアクセル、ブレーキ操作の補助といった領域でしか実現されていませんが完全自動運転もいずれ可能になると思います。可能になれば高齢者のアクセルとブレーキの踏み間違いから起きる事故やトラックの運転手の高齢化や担い手不足などといった現在生じている問題を解決できるでしょう。このように自動運転技術は未来をより良い方向に変えていくことのできる可能性を秘めているのです。そんな素晴らしい可能性を持つ先端技術に触れる機会を持たれたことをとても嬉しく思います。この講習で学んだことを今後の自分の生活や社会で活かせるように頑張っていきたいです。

## 受講風景



ワークショップで使用された小型車

次回は3月に同内容のワークショップを予定しています。今回参加できなかった生徒諸君はぜひ次回参加してみてください。

## 柳井正財団ホームページリニューアル

グローバル通信104号で海外大学を目指す前途有望な若者に奨学金を給付する柳井正財団についてご紹介しました。この度、同財団のホームページがリニューアルされました。2020年に本校を卒業してハーバード大学へ進学した山田健人君のインタビュー記事も掲載されています。以下のリンク先から御覧いただけます。

リンク

<https://www.yanaitadashi-foundation.or.jp/voice/yamada-kento/>

今号が2021年最後のグローバル通信となります。今年もご愛読ありがとうございました。オミクロン株の拡大が懸念される年末年始となります。繁華街は人出も増えているようで昨年末と比較すると世間全体として気の緩みも出てきているように感じます。各自でできる感染対策は着実に実行してどうか良いお年をお迎え下さい。